

# 祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究の展開状況 ―その数量的把握の試み―

高 野 宏

## I はじめに

### (1)問題の所在

日本の各地で伝承されている祭礼行事や民俗芸能は、さまざまな理由から重要なものと考えられている。第一には、それらが日本や各地域の歴史・文化を理解するための重要な手掛かりになるということがある。日本民俗学や、芸能史を含めた芸能研究は、こうした認識のもとにきわめて分厚い研究成果を蓄積させている。第二には、経済活動としての重要性が注目されている。祝祭の場である祭礼行事、観客が存在する民俗芸能は本来的に経済的な性格を帯びているが、近年では観光振興・地域振興の文脈でとりわけ重要視されている<sup>1)</sup>。第三に、祭礼行事や民俗芸能は、地域アイデンティティの核になりうるものであり、地域社会における社会的な紐帯を形成しうるものとして注目されている。東日本大震災の発生による「ふるさと」の喪失は、こうした祭礼行事等の性質を顕在化させた。

祭礼行事・民俗芸能の重要性は広く認識されていると考えられるが、それらの将来性は必ずしも明るいとはいえない。人口減少地域において祭礼行事や民俗芸能の存続が危うくなっていることは、繰り返し指摘されてきたところであり<sup>2)</sup>、一般的にも実生活を通じて強く実感されている。さらに近年では、阿波おどり(徳島県徳島市)の累積赤字や、黒石寺の蘇民祭(岩手県奥州市)の終了が報道された。このことで、多くの人口を有する都市の祭礼行事や、知名度があり参加者が日本全国から集まる祭礼行事であっても、資金面での問題や担い手不足の問題を抱えていることが明らかとなった。祭礼行事・民俗芸能の維持・存続は、人口減少地域に限定的な問題ではなく、多くの地域に共通する喫緊の課題であることが社会的に認識された出来事といえる。

こうした祭礼行事・民俗芸能をめぐる状況を反映して、とくに2000年前後から、それらの維持や存続に関する研究成果がさまざまな分野から提出されるようになってきている。具体的には、日本民俗学や芸能研究、文化人類学、社会学、地理学などの人文科学による成果はもちろん、社会科学や自然科学からの研究成果も目にするようになった。研究成果の数も増加傾向にあると実感しており、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続の問題は、学際的な関心事の一つになっていると推察している。しかし、その一方で、これら多数の既往研究を渉獵し、研究の学問分野を越えた広がりの様子やそれらの研究成果を整理・検討したものは管見の限り存在しない。祭

礼行事・民俗芸能の問題が表面化・深刻化し、研究が盛んに蓄積され始めて短くない時間が経過した現在、いったん既往研究を整理することが今後の学術的議論、さらには実践的な場面での応用においても必要と考えられる。

## (2) 本稿の目的と研究方法

筆者は祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究を渉猟し、その学際的な展開状況や蓄積された議論の内容を整理することが、今後の研究および社会的応用のために必要と考えている。しかしながら、関連する既往研究の数は膨大であり、本稿のみでそれらを量・質の両面で整理し終えることは紙幅の都合上難しいと考える。そこで、本稿では、個別具体的な議論の内容、すなわち質的な側面にはなるべく立ち入らず、関連する研究の数量的な分析を中心として、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究の学際的な展開状況を把握することにする。

具体的には、筆者が独自に作成した関連する既往研究(著作・論文・記事)のリストをもとに、①全体的および学問分野別の著作数の推移を分析し、この問題に関する関心の高まりと広がりを明確化する(第二章)。次に、②現段階における関連著作数の分野別構成比を示すとともに、研究分野によるアプローチの多様性を具体的な研究テーマの例示から説明する(第三章)。そして、③研究対象として取り上げられた祭礼行事・民俗芸能を一覧として整理し、当該研究の広がりを空間的にも示したい(第四章)。こうした一連の作業により、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究の、学問分野をまたがる展開状況を概観できると考える。議論の内容にまで踏み込んだ、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する議論の質的な整理・検討は、本稿での結果をふまえつつ、別稿で行うこととする。

なお、本稿での作業の基礎となる既往研究のリストは、以下の手順で作成した。

- (i) 「祭」「行事」「芸能」の3ワードから選んだ一つと、「維持」「継承」「継続」「存続」「存立」「保存」「伝承」「運営」の8ワードから選んだ一つを組み合わせ、国立情報学研究所「NII 学術情報ナビゲータ(以下、CiNii)」で論文・データを検索する(全24通りのワードでの検索を実施、最終検索は2024年9月20日)。
- (ii) 検索結果から、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究(著作・論文・記事)を抽出し、書誌情報をリスト化する。一般書籍や一般雑誌に掲載の記事、学会発表時に作成された要旨・予稿・抄録、行政等による無形民俗文化財の調査報告書は、基本的にこの段階において対象から除外する<sup>3)</sup>。また、民俗的な行事や伝統芸能であっても、個人や家に伝承されるもので、地域が実施・伝承の主体となっていないもの<sup>4)</sup>についても除外の対象とする。
- (iii) 抽出されたそれぞれの書籍・論文・記事について、背景となる学問分野を特定し、リストに情報として追記する。専門雑誌に掲載されている論文については掲載雑誌の学問分野とし、書籍や紀要類に掲載されている論文については基本的に著者の専門分野(researchmapや著者が所属する機関のHPなどを参照した)から適切なものを選択する。複数の学問分野にまたがる内容の書籍・論文は「複合領域」に分類する。

(iv)抽出された書籍・論文・記事の書名・タイトル(副題も含む)に研究対象とする祭礼行事や民俗芸能の名称が含まれている場合には、それを伝承地(開催地)とともに書籍・論文の情報に加える。ただし、「神楽」や「獅子舞」、「祭り」など、広義の名称であり、具体的な伝承地(開催地)が都道府県レベルでも特定できないものについては、情報としてのリストへの追記を行わなかった。

結果として、書籍59件、論文・記事594件の合計653件を抽出することができ、著者ないし編者、出版社/収録雑誌、書名/論文タイトル、総ページ数/掲載ページ、刊行年、背景となる専門分野、対象とする祭礼行事・民俗芸能の名称と伝承地(開催地)が、それぞれの情報としてリスト上に整理された。このリストを用いて上記①～③の分析・検討を行うが、書籍の数が多くないために、分析に際しては書籍と論文・記事とを区別しない。

なお、本稿の作業には幾つかの問題点があることも示しておきたい。第一の問題は、CiNiiという単一の検索システムに依存し、かつ、限られた検索キーワードで表示された結果からの抽出という点である。そのため、研究者には良く知られた既往研究が漏れている可能性もあるが<sup>5)</sup>、リストへの採録基準の不明瞭化を避けるため、それらについてはあえて検討することをしなかった。また、第二の問題として、(iv)の作業が本文中まで及ばないことが挙げられる。作業量の多さを考慮しての現実的な判断であるが、その結果として、既往研究で取り上げられた祭礼行事・民俗芸能は実際よりも少なく提示される。これらの問題点から、本稿は研究の動向を明らかにする「試み」の性格を有するといえる。

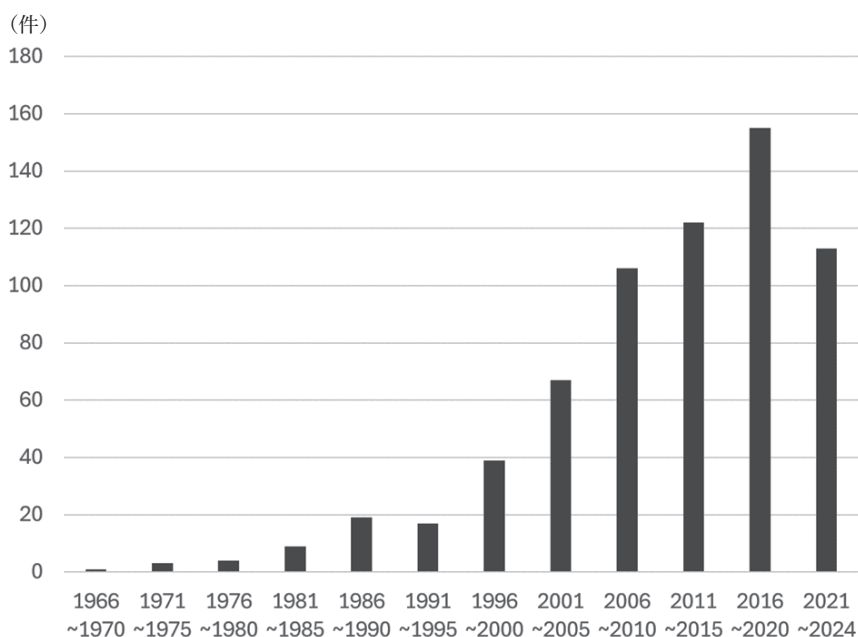


図 祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する著作数の推移

資料：CiNii検索結果より作成。

表1 研究分野ごとにみた祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する著作数の推移

研究分野	1966 ~1970	1971 ~1975	1976 ~1980	1981 ~1985	1986 ~1990	1991 ~1995	1996 ~2000	2001 ~2005	2006 ~2010	2011 ~2015	2016 ~2020	2021 ~2024
民俗学・人類学・宗教学	0	0	4	0	1	1	7	11	27	32	38	23
建築学・デザイン	0	0	0	0	0	0	5	10	8	13	13	7
社会学	1	1	0	1	2	1	2	5	5	10	18	9
教育学	0	2	0	1	3	2	3	9	9	7	8	7
地理学・地域研究	0	0	0	0	3	1	2	5	5	10	11	10
芸能研究	0	0	0	4	6	7	5	5	4	2	8	6
芸術学・音楽学	0	0	0	0	1	1	4	4	8	5	12	11
工学	0	0	0	0	0	0	1	4	7	9	5	3
政策学	0	0	0	0	0	1	0	1	2	4	7	2
体育学	0	0	0	2	0	1	2	1	5	6	0	0
歴史学	0	0	0	0	1	0	0	1	2	2	5	6
博物館学・アーカイブ学	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3	7	4
経済学・経営学	0	0	0	0	0	0	0	2	4	2	3	5
観光学	0	0	0	0	0	0	2	0	1	1	6	1
心理学・社会心理学	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	4	1
日本文学・言語学	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1	2
医学・看護学	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	2
家政学	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0
法学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
複合領域	0	0	0	0	0	0	0	2	3	3	1	2
その他	0	0	0	0	1	2	6	3	9	8	8	11

資料：CINI検索結果より作成。

## Ⅱ 全体および学問分野別にみた著作数の推移

### (1) 全体における著作数の推移

まず、基礎的な作業として、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究の全体的な蓄積状況を確認する。

筆者が作成したリストで最も古い著作が1966年の論文であるため、同年から5年刻みに著作数の推移をグラフとして示した(図)。このグラフから、1990年代半ばまで、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する著作の公表はあまり多くなく、研究は比較的低調であったことが分かる。1995年までの著作数は53件であるため、平均してみれば10年間で17.7件という研究成果の蓄積状況であった。しかしながら、その後、加速度的に研究の蓄積が進むことになる。1996年から2005年までに公表された著作数は106件、2006年から2015年のそれは227件におよぶ。さらに、2024年9月時点でCiNiiに掲載されている、2016年以降に公表された関連著作の数は267件であるため、未だその研究成果の蓄積速度は上がり続けていることになる。

祭礼行事・民俗芸能の維持・存続の問題は身近に実感されるものであることから、高度経済成長期以降の過疎化の進展とともに議論されてきた「古いテーマ」のような先入観がある。その一方、こうした数量的な検討をすることによって、実は当該の問題が近年になって急速に議論が進展している「ホットトピック」であることが理解できる。

### (2) 研究分野ごとにみた著作数の推移

次に、こうした研究成果の蓄積がどの分野によって、いつごろからなされてきたのかを確認するため、学問分野ごとの著作の公表状況を確認する。表1は、図と同様、1966年から5年刻みで、学問分野ごとに公表された著作数を整理したものである。

この表1をみると、第一に、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続の問題に関係する学問分野の多さに目が留まる。表1の縦軸には、現在までの研究蓄積が多い順番に学問分野を並べているが、芸能研究、民俗学・人類学・宗教学から家政学、法学、複合領域にいたるまで20の学問分野が並ぶ。そこには、教育学や体育学、工学や医学・看護学など、祭礼行事や民俗芸能とは距離があると思われる学問領域も含まれている。このように、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続の問題は人文科学、社会科学、自然科学の枠組みを越えた、きわめて学際的なテーマなのである。ちなみに、「その他」に分類されたものの過半数(48件のうち26件)は、男鹿のなまはげ保存伝承促進委員会『男鹿のなまはげ その伝承と基盤を探る：なまはげシンポジウム』(1997)など、地元団体や大学などの研究機関が刊行したシンポジウム等の報告書である。

そして、表1の各セルには数値(1分野の5年間の著作数)によって段階的(著作数1、2～5、6～10、11～15、16以上の5段階)に色分けをしている(「その他」を除く)。これにより、研究分野を超えた研究の広がりを視覚的・直感的に捉えることができる。つまり、筆者が作成したリストに基づけば、祭礼行事・民俗芸能の保存・存続に関する研究は、社会学や教育学から成果の蓄積が始まったが(1960～70年代)、とくに2000年前後から、それらに加えて民俗学・人類学・宗教学、建築学・デザイン、地理学・地域研究が研究の中核を担うようになった。それと同時に、2000年前後からは、多様な学問分野でも研究成果がみられるようになる。1990年代前半

までには11の学問分野で研究成果がみられるに過ぎなかったが、2000年代前半までには17の学問分野で研究の蓄積がなされた。このように、この問題への関心は、20もの学問分野で同時並行的に高まったのではなく、幾つかの研究の核となる学問分野からその他の周辺の学問分野へ、タイムラグをもって広まったのである。

表2 分野別にみた関連著作の報告数と構成比

学問分野	報告数 (件)	構成比 (%)	学問分野	報告数 (件)	構成比 (%)
民俗学・人類学・宗教学	144	22.0	経済学・経営学	16	2.4
建築学	56	8.5	博物館学・アーカイブ学	16	2.4
社会学	55	8.4	観光学	11	1.7
教育学	51	7.8	心理学・社会心理学	10	1.5
芸能研究	47	7.2	日本文学・言語学	6	0.9
地理学・地域研究	47	7.2	医学・看護学	5	0.8
芸術学	46	7.0	家政学	5	0.8
工学	29	4.4	法学	1	0.2
体育学	17	2.6	複合領域	11	1.7
政策学	17	2.6	その他	48	7.3
歴史学	17	2.6	合 計	655	100.0

資料：CiNii検索結果より作成。

### Ⅲ 関連著作の分野別構成比および特徴的な研究テーマ

#### (1) 関連著作の分野別構成比

既往研究653件を研究分野ごとに集計し、現時点における研究蓄積の状況を整理したものが表2である(二つの分野にまたがる研究成果をダブルカウントしているため、合計は書籍・論文・記事の総数を上回る655件となっている)。

もっとも多くの研究蓄積を有するのは民俗学・人類学・宗教学であり(構成比22.0%、報告数144件)、それに次いで建築学、社会学、教育学、芸能研究、地理学・地域研究、芸術学が高い構成比となっている(いずれも7~8%台、報告数50件前後)<sup>6)</sup>。これらの学問分野には比較的早くから研究の蓄積を開始した分野が多く、現時点における研究の中核を形成している。その他、工学の構成比がやや高いものの(4.4%、報告数29件)、体育学、政策学、歴史学、経済学・経営学、博物館学・アーカイブ学、観光学、心理学・社会心理学は構成比2%程度で、研究の中核に対して周辺の位置にあるといえる(報告数は10件台)。そして、日本文学・言語学、医学・看護学、家政学、法学はいずれも構成比1%未満と低く、当該の研究においては周縁的な存在となる(報告数10未満)。繰り返しになるが、周辺・周縁に位置する学問分野ほど、研究の高まりの時期が遅いのが一つの特徴である。

#### (2) 学問分野によるアプローチの多様性

ここまで祭礼研究・民俗芸能の維持・存続に関する研究の展開について分析を進めてきたが、

当該の研究には文化研究とは比較的距離のある、一般的には意外性のある学問分野も多く含まれている。教育学、工学、心理学・社会心理学、医学・看護学、家政学などがそれである。これらの学問分野でなされた研究の内容を詳述することは本稿の目的の範囲を超えるが、祭礼研究・民俗芸能の維持・存続をめぐる研究の学際性やアプローチの多様性を強調するために、いくつかの学問分野から特徴的な研究テーマを紹介する。

まず、教育学においては、学校教育と地域の祭礼行事・民俗芸能との関りが重点的に検討されている。これは、人口減少や成人による参加の減少を補うように、主に小中学生が各地の祭礼行事・民俗芸能で重要な担い手になってきている現状を受けてのことである。三浦俊一ほか「弘前ねぶた祭り運行団体と子ども・学校との関わり現状と意識」(2009)は、そうした状況を分析したものとして挙げられる。また、鈴木智恵「郷土の伝統芸能の継承と発展を目指した教育実践：音楽劇づくりを通して」(2014)のように、教育活動を地域の祭礼行事や民俗芸能の継承に生かしていこうとする研究も多数見られる。こうした傾向を同じくするのが家政学である。ここでは、「学校」という枠組みは弱められるが、「子どもの発達」という面から地域の祭礼行事・民俗芸能が取り扱われる。例として、山本和人ほか「青少年の学校外活動としての伝統芸能の継承と普及：小木おけさ・子ども鬼太鼓の場合」(2004)を挙げる。ここでは、地域の伝統芸能は「学校外活動」として位置づけられている。

次に、工学においては、先端情報技術を用いた祭礼行事・民俗芸能の伝承補助が研究テーマの多くを占める。たとえば、北川博美・磯本征雄「伝統芸能の保存と継承のためのデジタル・コンテンツ提示手法の提案」(2004)が挙げられる。また、福森隆寛ほか「日本無形文化財のインタラクティブ音場体験システムの開発」(2015)のように、参加者や彼らの体験を広げる取り組みもなされている。緑化学からは、日高美美ほか「伝統行事『鞍馬の火祭』で用いる森林の柴採取ポテンシャルの評価」(2021)がみられ、森林資源の持続性という面から祭礼行事が検討されている。なお、博物館学・アーカイブ学も同様の傾向があり、デジタルアーカイブによる祭礼行事・民俗芸能の記録(祭礼行事・民俗芸能を支える技術的な部分も対象とされる)が中心となっている。

そして、医学・看護学では、社会医学や地域住民のQOLといった文脈で地域の祭礼行事などが取り上げられている。大木美穂ほか「コロナ禍における祭りの実態とその継承・発展に関する研究」(2023)は、コロナ禍における祭礼行事の中止や縮小が地域におけるソーシャル・キャピタル醸成に負の影響があるとし、その継続の重要性を指摘している。また、呉地祥友里ほか「施設ケア提供者の伝統行事への認識と高齢者ケアの実際：沖縄県宮古島の一介護老人福祉施設の事例」(2010)は、施設に入居する高齢者の祭礼行事を含む伝統行事への参加ニーズを満たしていくことが、彼らのQOLを維持するために必要としている。このように、医学・看護学では、祭礼行事が人間の福祉に直接的に関わるものとして位置づけられている。それは、祭礼行事や民俗芸能を地域経済の発展に資するものとして捉える向きのある観光学、経済学などとは全く異なる捉え方である。

なお、「複合領域」として筆者が分類したものの中には、板谷(牛谷)直子ほか「『記憶地図』に

表3 既往研究で取り上げられた祭礼行事・民俗芸能

	祭礼行事/民俗芸能	伝承地	報告数		祭礼行事/民俗芸能	伝承地	報告数										
北海道	野幌太々神楽	江別市	2	埼玉	白久串人形	秩父市	1										
	丘珠獅子	札幌市	1		埼玉	神楽	—	1									
	有明獅子舞	初山別村	1			埼玉	中福の神楽	川越市	1								
	健夏山笠	芦別市	1				埼玉	大風揚げ習俗	春日部市	1							
	鹿子舞	—	1					埼玉	天狗祭り	秩父市	1						
	川下祭	積丹町余別	1						埼玉	番匠免大般若経祭り	三郷市	1					
	アイヌ古式舞踊	—	1							埼玉	三匹獅子舞	—	1				
	青苗言代主神社例祭	奥尻島	1								千葉	農村歌舞伎	—	1			
	ローソクもらい	—	1									千葉	オビシヤ行事	流山市	1		
	四ヶ散米行列	小樽市	1										東京	南洋踊り	小笠原諸島	2	
青森	ねぶた祭	青森市、弘前市等	5	東京										小沢の式三番	檜原村	1	
	八戸法霊神楽	八戸市	1		東京									山車巡行	八戸市	1	
	八戸えんぶり	八戸市	1			東京								神田明神の祭礼	千代田区	1	
	祭囃子	津軽地方	1				東京							初午祭	三宅島	1	
	岩手	早池峰神楽	花巻市					3						東京	下石原八幡神社祭礼	調布市	1
		北上みちのく芸能まつり	北上市					2	東京						祭囃子	大田区	1
		しし踊り	遠野郷					1		東京					セーノカミー	多摩市山	1
		小正月行事	北上市					1			東京				武蔵府中くらやみ祭	府中市	1
		さんさ踊り	盛岡市					2				東京			神着天王祭	三宅島	1
		チャグチャグ馬コ	盛岡市					1					東京		神輿渡御	東京圏	1
岳神楽		花巻市	1	東京				神着木遣太鼓と三宅太鼓							三宅島	1	
中里七ツ舞		岩泉町	1		東京			長崎獅子舞							豊島区	1	
中野七頭舞		岩泉町	1			神奈川		五所八幡宮例大祭							中井町	1	
みずぎ雛		遠野市	1				神奈川	祭囃子							川崎市	1	
宮城	どんと祭	仙台市	6					神奈川						裸押合い祭り	南魚沼市他	2	
	大崎八幡宮例大祭	仙台市	1						新潟					延年（根知山寺）	糸魚川市	1	
	秋保の田植踊	仙台市	1							新潟				内野祭り	新潟市	1	
	仙台すずめ踊り	仙台市	1								新潟			小木おけさ	佐渡市	1	
	秋田	竿燈まつり	秋田市									4		新潟	子ども鬼太鼓	佐渡市	1
		男鹿のなまはげ	男鹿市									3	新潟		佐渡鬼太鼓	佐渡市	1
		曳山行事	秋田市、角館町	3								富山			砺波夜高祭	砺波市	2
		西馬音内盆踊り	羽後町	2	富山										おわら風の盆	富山市	1
		飾山囃子	角館町	1		富山									獅子舞	高岡市	1
		番楽	—	1			富山								高岡御車山祭	高岡市	1
山形		黒川能	鶴岡市	4				富山							獅子	高岡市	1
		真空川番楽	真空川町	1					石川						青柏祭	七尾市	1
		山形花笠まつり	山形市	1						石川					夏祭	輪島市	1
		加勢烏	上市市	1							石川				神社祭礼	門前町	1
	福島	じゃんがら念仏踊り	いわき市、双葉町等	5										石川	皆月山王祭	輪島市	1
		空也踊躍念仏	会津若松市	1									石川		アマメハギ	能登地域	1
		葉山祭り	飯館村	1								福井			長床	若狭地方	2
		会津彼岸獅子	会津若松市	1	福井										アッポツシャ	蒲生町	1
		請戸の田植踊	浪江町	1		福井									北潟祭	あわら市北潟	1
		三匹獅子舞	葛尾村	1			福井								神社祭礼（柴神社）	永平寺町	1
刈宿鹿舞		浪江町	1	山梨				オコヤ作り							笛吹市	1	
相馬野馬追		相馬市	1					山梨	人形三番叟						小海町	3	
茨城		鹿島神宮祭	鹿嶋市						1	山梨					御柱祭	諏訪市	2
		日立風流物	日立市						1		山梨				新野の雪祭り	阿南町	1
	笠間の菊まつり	笠間市	1						山梨					青山様とぼんぼんの伝承	松本市域	1	
	栃木	八坂神社太々神楽	宇都宮市										1	山梨	小正月の火祭り・三九郎	松本市	1
		山あげ祭	那須烏山市									1	山梨		霜月祭り	飯田市	1
		城嶽舞	大田原市		1							山梨			念仏踊り	阿南町	1
		山車	栃木市		1	山梨									人形浄瑠璃	下伊那地方	1
		群馬	鬼石夏祭り		藤岡市		1								山梨	祇園祭	佐久市
			祇園祭	前橋市	1		山梨									禰祭り	佐久市
			熊谷うちわ祭	熊谷市	2			山梨								コト念仏・コトの神送り	飯田市
屋台囃子			秩父市	1	山梨					柱松柴燈神事						飯山市	1
ジャランポン祭り			秩父市	1						山梨	野沢温泉道祖神祭り					野沢温泉村	1
秩父夜祭			秩父市	1					岐阜		郡上おどり					郡上市	2

資料：CiNii 検索結果より作成。



表3 既往研究で取り上げられた祭礼行事・民俗芸能(つづき)

	祭礼行事/民俗芸能	伝承地	報告数		祭礼行事/民俗芸能	伝承地	報告数	
岐阜	鳥追い行事	上矢作町	1	山	壬生の花田植	北広島町	1	
	能郷の猿楽能	本巣市	1		山焼き(秋吉台)	美祢市	1	
	山車、からくり	羽島市	1		鷲舞	山口市・津和野市	1	
	盆踊り	本巣市	1		もりさま祭り	山口市	1	
	市地歌舞伎	恵那市	1		徳	阿波踊り	—	3
静岡	岸初神社大神楽	郡上市	1	獅子舞		鳴門市、美馬市	2	
	西浦田楽	浜松市	4	阿波人形浄瑠璃		—	1	
	藤守の田遊び祭り	焼津市	1	三番叟まわし		—	1	
	盆念仏	遠州地域	1	船津太刀踊り		海陽町	1	
	十二段舞楽	森町	1	箱まわし	徳島市	1		
岡	古宇磯祭り	沼津市	1	愛媛	西條祭り	西条市	1	
	見付天神裸祭	磐田市	2		牛鬼行事	宇和島地方	1	
	花祭	奥三河地方他	8		武左衛門相撲	鬼北町日吉	1	
	朝倉の梯子獅子	知多市	2		座敷雛	鬼北町	1	
	鳥羽の火祭り	西尾市	1		秋祭り	西予市	1	
愛知	国府宮はだか祭	稲沢市	1	高知	氏神信仰	四万十町	1	
	きねこさ祭(七所社)	名古屋	1		博多祇園山笠	福岡市	2	
	石取祭	桑名市	2		福	八女福島燈籠人形	八女市	1
	上野天神祭	伊賀市	1		岡	わっしょい百万夏まつり	北九州市	1
	鳥出神社の鯨船行事	四日市市	1		新開能	みやま市	1	
滋賀	曳山祭	長浜市、米原市	2	佐賀	浮立	伊万里地方	1	
	ヨシ刈り・ヨシ松明祭り	草津市	1		長崎	島原子ども狂言	島原市	2
	大君ヶ畑かんこ踊り	多賀町	1			皿山人形浄瑠璃	波佐見町	1
	六斎念仏踊り	高島市	1			オーモンデー(念仏踊)	嵯峨島	1
	江州音頭	—	1			カラクリノゾキ	南島原市	1
山の神行事	栗東市	1	岳路の念仏	長崎市		1		
京都	太鼓踊り	長浜市	1	熊本	東極山の歌念仏	長崎市	1	
	祇園祭	京都市	8		江迎千灯籠まつり	佐世保市	1	
	地藏盆	京都市他	3		大分	虫地藏祭り	水俣市	1
	六斎念仏	京都市	2			若宮八幡秋季大祭	豊後高田市	1
	今宮祭	京都市	2			盆行事	姫島村	1
	壬生狂言	京都市	1	宮崎		高千穂神楽	高千穂町	1
	居籠祭り	相楽郡	1			高原の神舞	高原町	1
	東山大文字の送り火	京都市	1		畷川神楽	高原町	1	
	豊国社の祭礼	京都市	1		鹿	大里七夕踊	いちき串木野市	3
	山鉾祭礼	京都市	1			太鼓踊	加世田市	1
	鞍馬の火祭	京都市	1	硫黄島太鼓踊り		三島村	1	
	春日祭	京都市	1	谷山ふるさと祭		鹿児島市	1	
	嵯峨大念佛狂言	京都市	1	豊年祭		宇検村芦検	1	
	大阪	葵祭	宮津市	1	児島	エイサー	—	1
		だんじり祭	岸和田市、堺市他	6		東郷文弥節人形浄瑠璃	薩摩川内市	1
地藏盆		神戸市、豊岡市	2	十五夜祭り		坊津町泊	1	
人形浄瑠璃		淡路島	1	初山とトシダマ祭り		悪石島	1	
生田祭		神戸市	1	モイドン等		指宿市	1	
奈良	東大修二会	奈良市	1	沖	羽島舟唄	いちき串木野市	1	
	荒蕪・秋祭りの秋祭	天理市	1		エイサー	読谷村、宜野湾市他	5	
	東照宮祭礼、和歌祭	和歌山市	4		綱引き	八重瀬町他	3	
	春駒	湯浅町	1		琉球舞踊	—	3	
	燈籠焼き	由良町	1		鍛冶工狂言	竹富島	2	
和歌山	佐太神社祭祀・佐陀神能	松江市	2	シヌグ(シニグ)	伊平屋島	2		
	石見神楽	石見地方	2	種子取祭	竹富島	1		
	美保神社祭祀	松江市	1	村落祭祀	宮古諸島	1		
	護法祭	—	1	シーヤーマー	八重瀬町	1		
	神楽	備中地方	1	御嶽の祭祀	八重山町・竹富島他	1		
島根	神楽(芸北神楽、比婆荒神神楽など)	北広島町、広島市他	7	ウンジャミ	伊平屋島	1		
	権伝馬競漕(住吉祭)	大崎上島	1	—	「山・鉾・屋台行事」	—	4	

資料: CiNii 検索結果より作成。

よる無形の文化遺産の現状と継承の課題：宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として」(2015)など、「記憶地図」を被災地の文化継承に役立てようとする研究が複数みられる。これらも独自性のあるアプローチとして注目される。

このように、同じように祭礼行事や民俗芸能の維持・存続を研究の対象としていても、学問分野が違えばアプローチの仕方は大きく異なっている。ときには祭礼行事や民俗芸能をどのように位置づけるか、ということから差異が存在するのである。こうしたところに当該研究の学際的な広がりや学術的な面白さを感じることができ、改めて学問分野を越えた研究成果の渉猟と整理・分析の必要性を主張する根拠を見出すことができる。

#### IV 研究対象として取り上げられた祭礼行事・民俗芸能

以上のように、祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究は様々な学問分野で、多様なアプローチを展開しているが、その研究対象はどこに求められてきたのであろうか。筆者が作成したリスト全体の著作は653であるが、そのうち328に伝承地(開催地)が特定できる祭礼行事・民俗芸能の名称が書名・タイトルに含まれている。それらを都道府県ごとに集計して、一覧表にまとめたものが表3である。

表3によりまず気づかれることは、対象として取り上げられた祭礼行事・民俗芸能の種類の数に地域的な偏りが大きいということである。全体的な傾向としては、京都府を除く近畿から鹿児島を除いた九州地方までの西南日本、東京都・埼玉県を除く関東地方にその数が少ない。さらにいえば、筆者作成のリストにおいては、鳥取県、香川県の祭礼行事・民俗芸能を書名やタイトルに含む書籍・論文・記事はなかった。それに対して、北海道および鹿児島・沖縄県、東京都、埼玉県、長野県、京都府で数が多くなっている。国土の南北地域はアイヌ文化、琉球文化への特別な視線の存在、京都府については西日本の歴史・文化の中心地としての認識から研究者の興味関心が集まったと推察される。こうした空間的な偏りは、取り上げられた回数(表中の「報告数」の合計)においてもほぼ同様にみられる。

次に、それぞれの祭礼行事・民俗芸能に目を向けていくと、特定のものに対して注目が集まっていることも読み取られる。もっとも取り上げられた回数が多いのは、愛知県奥三河地方の花祭と京都府京都市の祇園祭である(ともに8回)。前者は、早川孝太郎『花祭』(1968)によって早い段階から学術的な注目を集めてきた民俗芸能であり、後者はいうまでもなく全国的な知名度を有する都市祭礼である。それらに次いで報告数が多いのは、広島県内の神楽(芸北神楽・比婆荒神神楽など、7回)、大阪府内のだんじり祭(岸和田市など、6回)、宮城県仙台市のどんと祭(6回)、青森県内のねぶた祭(青森市など、5回)、福島県内のじゃんがら念仏踊り(いわき市など、5回)である。その一方で、報告数が1回の祭礼行事・民俗芸能も多く確認される。表3には230の祭礼行事・民俗芸能があるが、実に183(79.6%)がそれに該当する。このことから、研究者が取り上げる対象には地域的に偏りがあるだけでなく、特定の祭礼行事・民俗芸能に集中しやすい傾向があるといえる。

## V おわりに

本稿では祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究を渉猟し、その学際的な展開状況についての数量的把握を試みた。それにより、以下の4点が明らかになった。

- ・祭礼行事・民俗芸能の維持・存続に関する研究は、とりわけ1990年代後半以降、加速度的に成果が蓄積されている。
- ・2000年前後から、当該の研究に関連する学問分野も拡大し、現在では人文科学、社会科学、自然科学の枠を超えて、少なくとも20の学問分野で研究成果が蓄積されている。
- ・学問分野によって祭礼行事・民俗芸能の捉え方が大きく異なる場合もみられ、その維持・存続問題へのアプローチにも学問分野特有の傾向が確認された。
- ・事例研究の研究対象として取り上げられた祭礼行事や民俗芸能には地域的な偏りや、特定のものへの集中がみられ、研究の蓄積に濃淡が存在した。

以上の結果は、幾つかの作成上の課題を有する既往文献リストに基づいたものである。また、研究対象として取り上げられた祭礼行事・民俗芸能についても、書籍・論文・記事の書名・タイトルに含まれるもののみを集計した。より正確な議論によって再検討される余地が残されていることを、本稿の最後に繰り返し記しておきたい。

## 注

- 1)1992年における「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」(通称「おまつり法」)の制定は、こうした社会的動向の画期となった出来事である。
- 2)たとえば、星野紘『村の伝統芸能が危ない』(2009)など。
- 3)ただし、報告書であっても祭礼行事・民俗芸能の維持・存続を全体の主題としているものについては計上した。
- 4)具体的には芸妓が習得・伝承する芸能、地域行事と結びついていない家元制度での能楽や歌舞伎、一般家庭で実施される通過儀礼や先祖祭祀、年中行事などが挙げられる。
- 5)たとえば、注2で挙げた星野紘『村の伝統芸能が危ない』(2009)も検索結果には含まれていなかった。
- 6)建築学に多くの研究成果が蓄積されているのは、その下位分野として都市計画学や農村計画学が含まれていることが大きい。

## 文献

- 板谷(牛谷)直子・中谷友樹・前田一馬・谷端 郷・平岡善浩(2015)。「記憶地図」による無形の文化遺産の現状と継承の課題：宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として。歴史都市防災論文集9, 73-80.
- 男鹿のなまはげ保存伝承促進委員会(1997)。「男鹿のなまはげ その伝承と基盤を探る：なまはげシンポジウム」男鹿のなまはげ保存伝承促進委員会.
- 大木美穂・齋藤 篤・岩垣穂大・扇原 淳(2023)。「コロナ禍における祭りの実態とその継承・発展に関する研究」地域活性研究19, 207-215.
- 北川博美・磯本征雄(2004)。「伝統芸能の保存と継承のためのデジタル・コンテンツ提示手法の提案」北川博美 教育システム情報学会誌21(4), 384-389.
- 呉地祥友里・大湾明美・佐久川政吉・下地敏洋・田場由紀(2010)。「施設ケア提供者の伝統行事への認識と高齢者ケアの実際：沖縄県宮古島の一介護老人福祉施設の事例」沖縄県立看護大学紀要11, 51-57.

- 鈴木智恵 (2014). 郷土の伝統芸能の継承と発展を目指した教育実践：音楽劇づくりを通して. 読売教育賞受賞者論文集 63, 167-182.
- 日高美美・深町加津枝・藤井基弘 (2021). 伝統行事「鞍馬の火祭」で用いる森林の柴採取ポテンシャルの評価. 日本緑化工学会誌 47 (1), 69-74.
- 福森隆寛・吉元直輝・中野皓太・中山雅人・西浦敬信・山下洋一 (2015). 日本無形文化財のインタラクティブ音場体験システムの開発. 日本音響学会誌 71(11), 590-598.
- 星野 紘 (2009). 『村の伝統芸能が危ない』岩田書院.
- 三浦俊一・大谷良光・大野絵美 (2009). 弘前ねぶた祭り運行団体と子ども・学校との関わり方の現状と意識. 弘前大学教育学部紀要 102, 125-132.
- 山本和人・岡本めぐみ・鈴木 愛・松本桃子・小浜歌織 (2004). 青少年の学校外活動としての伝統芸能の継承と普及：小木おけさ・子ども鬼太鼓の場合. 東京家政大学博物館紀要 9, 89-112.